

谷崎潤一郎「母を恋ふる記」の背景——佐藤春夫、鶯沼

田中俊男

「母を恋ふる記」（「大阪毎日新聞」大正八年一月一八日～二月一九日、「東京日日新聞」同年一月一日～二月二二日）成立の背景を考えることが本稿の目的である。二つの仮説を立て、順に論証する。

第一の仮説は、佐藤春夫作品が今まで言われてきた以上に影響を与えているのではないか、ということである。周知のとおり、谷崎自身が後年「私の「母を恋ふる記」は、佐藤の月の美しさを描いた短篇「月かげ」に影響されて、書いたものである^①と明言している。だが、これまで具体的な比較はほとんど行われてこなかった。本稿は「月かげ」に限定せず、「母を恋ふる記」発表以前の佐藤作品を精査し、相応の影響があったことを明らかにする。

第二の仮説は、舞台となった場所には地理的なモデ

ルが存在するのではないか、ということである。主人公「私」がさまざま不思議な場所については、そこに海や沼・蓮などが存在する理由に関して、母性の問題とからめながら心理学的・民俗学的な考察が行われ、野口武彦、永栄啓伸、千葉俊二らを先駆として重要な成果が積み重ねられている^②。こうした深層的な読解に対し、本稿は直接のモデルを提示する。海や沼・蓮、さらに電信柱などは作品発表の前年、実際に谷崎が同一の場所で歩き観察したものであろうという立場から検証を行う。

第一の仮説が本稿の一章、第二の仮説が二章となる。

「月かげ」からの影響関係を認めた先述の谷崎証言については、複数の論文で紹介がなされている。たとえば千葉俊二は「月光の描写においては何といつても風流を称して「月光的恍惚」と呼んだ佐藤春夫が本家であり、谷崎潤一郎のはその影響下にあった」と述べる。だが、「佐藤春夫からの影響関係の検証はともかくとして」と書き、二編のテキストの比較は行っていない⁽⁸⁾。また森安理文は谷崎証言の引用に続けて、「佐藤春夫の『月かげ』が、なるほど直接的な起筆の動因になったかもしれないけれども」と留保し、「海、死、月、母という連想の起伏は、そんな身近なところにあるものではなく、むしろ民俗学でいう、幼時期の記憶をふまえた「妣が国」への拡がりをおぼせるのである」と別の方向へ話を展開させる⁽⁹⁾。つまり千葉も森安も「影響関係」は「月光の描写」「月の美しさ」にとどめ、そこから先へは踏み込んでいないのである。作者の証言に四〇年以上の時間の隔たりがあることを考慮するならば、この慎重さは当然と言つていいかもしれない。

これに対し近年二編の具体的な比較を試みたのは福岡大祐である。福岡は「音声／語り手／異同／現象性の四点から、「月かげ」との関連を吟味」した⁽¹⁰⁾。ただし福岡の関心は音声・視聴覚などの知覚語彙の特性にあり、問題の設定の仕方が本稿とは異なる。

今問題にしたいのは、「月かげ」を含めた二人の作品がどのように似ているのかということのだが、似ているはずだということ概括を行い、影響を強調した先駆者として中村光夫の名を逸するわけにはいかない。谷崎と佐藤が残した互いの人物評や作品評⁽⁶⁾に基づくと大著が『佐藤春夫論』⁽⁷⁾である。

中村は「両氏を結びつけた若い友愛は、ほとんど激情に近いもので、芸術家がお互に理解者を得たと信じるときは恋愛に似た感情の放電が見られます」と述べ、「大正六年の六月から、十年三月に一度絶交するまで、佐藤氏は谷崎氏から世間的には世話になつた代りに、内面的には谷崎氏を「啓発」する立場にあたと思はれます」と書く。大正六年六月は二人が知り合ったとされる期日である。谷崎はその後無名の佐藤を励まし、作品発表の舞台を紹介するなどの「世話」を行った。中村の言う「啓発」の内容は「佐藤氏の批評や忠言がこの時期の潤一郎の進路にかなりの影響を及ぼした」とである。

中村の強調点は本稿の趣旨のバックグラウンドである。だが残念ながら中村が述べているのは「批評や忠言」による影響関係であつて、作品同士のそれではない。本稿は中村の立場に同意しつつ、作品を対照する作業を行つていく。まず「母を恋ふる記」発表以前に佐藤が発表した作品をすべて点検する。そして「母を恋ふる記」と明快な類似点があつたと見なしたものを

列挙する。点検の結果類似が見られた佐藤作品は三作四種類であった。A「月かげ」雑誌初出版とB単行本天佑社版、C「田園の憂鬱」単行本天佑社版、D「青白い熱情」雑誌初出版である。

当然のことながら佐藤作品から「母を恋ふる記」への影響を語るためには、谷崎が「母を恋ふる記」執筆以前に佐藤作品を読んだことが前提になる。先に挙げた四種類A～DのうちBとCはそれらを収録した単行本天佑社版『病める薔薇』の序文を谷崎が書き、その中で個々の作品の解説を行っていることから、読んでいたと見なせる。後年の証言だが、「田園の憂鬱」の内容など、作品を書き上げる前に何度か聞いた⁸⁾とあり、とりわけCは強く印象に残っていると思われる。またAは先述の谷崎自身の証言から読んでいたと見なせる。問題はDだが、類似性の強さから読んでいたと見なす。

なお、引用するA～Dの佐藤テキスト及び「母を恋ふる記」その他の谷崎テキスト底本は次の通りとする。谷崎作品は中央公論社『谷崎潤一郎全集』（昭和四一年一月～昭和四五年七月）を用いる（第二章以下も同様）。「異端者の悲しみ」の「はしがき」のみ初出の「中央公論」を用いる。

佐藤のA「月かげ」初出版は臨川書店『定本佐藤春夫全集』（平成一〇年四月～平成一三年九月）を用いる。B「月かげ」天佑社版とC「田園の憂鬱」天佑社

版はともに復刻本（『病める薔薇』名著復刻全集 近代文学館 昭和四四年四月）を用いる。D「青白い熱情」初出版は臨川書店『定本佐藤春夫全集』（前出）の本文と校異を参照してテキストを確定する。

なお時系列を明確にするため、簡単な年表を先に掲示しておく。引用する作品については波線を入れて示す。問題となるのは雑誌の実際の発売日が発行日とずれていることだが、原則として発行日の前月に発売された⁹⁾と見なし、前月のところに記載する。

		佐藤 春夫	谷崎 潤一郎
	大正五年四月	神奈川県築郡中里村に転居。一二月まで。	
	一月	「西班牙犬の家」を「星座」に発表。	
	大正六年五月	「病める薔薇」を「黒潮」に発表。	母の関、亡くなる。
	五月 か六月	谷崎と知り合う。	
	六月		「異端者の悲しみ」とその「はしがき」を「中央公論」に発表。 「晩春日記」を「黒潮」に発表。
	八月		「活動写真の現在と将来」を「新小説」に発表。
	一二月		「襤褸の光」を「週」に発表。 ^{*1}

大正七年一月	二月	三月	六月	七月	八月	十月	十一月	十二月	大正八年一月
	A「月かげ」を「帝国文学」に発表。		「李太白」を「中央公論」に発表。	鶴沼に谷崎を訪ねる。	谷崎に単行本のごとで相談（八月二日以前）。*2 単行本『病める薔薇』の出版元が天佑社に変更され、発売が早まる。原稿を月末までに天佑社に渡す。*3 「田園の憂鬱」を「中外」に発表。		『病める薔薇』を天佑社から刊行。B「月かげ」、C「田園の憂鬱」所収。*5	D「青白い熱情」を「中央公論」に発表。	
鶴沼で芥川龍之介と会う。		鶴沼の旅館・東屋滞在。九月上旬まで。			「魚の李太白」を「新小説」に発表。*4	上旬、中国へ出発。一月上旬帰国。			「母を恋ふる記」を「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載。二月まで。

*1 週刊紙「週」は一月五日、一二日、一九日の三回連載だが、発売は一二月から一月と見なす。「谷崎潤一郎全作品事典」（「別冊国文学 谷崎潤一郎必携」平成十三年一月）の解説で、細江光はこの作品の画家Aのモデルは佐藤春夫だと述べている。

*2 佐藤春夫の手紙から（佐藤豊太郎宛て八月二日付『定本佐藤春夫全集』所収）。

*3 佐藤春夫の手紙から（佐藤豊太郎宛て八月二日付『定本佐藤春夫全集』所収）。

*4 「谷崎潤一郎全作品事典」（前出）の解説で、日高佳紀は「谷崎自らが推薦して発表させ、作中にも取り上げられている佐藤春夫『李太白』（「中央公論」大7・7）に呼応して書かれた幻想小説」だと述べている。

*5 発行日は十一月一日。ここに収められた作品は一六作（「病める薔薇」と「田園の憂鬱」は目次では分けてあるが、本文では分けていないのでまとめて「田園の憂鬱」として扱う）。

ここから作品間の共通点を八つに分けて述べる。本文引用は「母を恋ふる記」、佐藤作品の順に行う。

一、月を見て永遠を思うこと^⑧。

・「母を恋ふる記」

「誰でもこんな月を見れば、永遠と云ふことを考へ

ない者はない」

・ B 「月かげ」天佑社版

「昼間の月にいたつては、蓋し彼の女の恋人にして彼の女のこの美しい死顔を見る時、(中略)永遠を思うて心は冷たく静かになる」(「彼の女の恋人」は月を賞美する人間、「彼の女」は月を指しているので、人が月を「見る時」、「永遠を思う」と言っていることになる)。

二、月を見て既視感を覚えること。

・ 「母を恋ふる記」

「誰でもこんな月を見れば、永遠と云ふことを考へない者はない。(中略)——私は前にもこんな景色を何処かで見た記憶がある。(中略)或は、自分が此の世に生れる以前の事だつたかも知れない。(中略)其れとも亦、実際の世界でなく、夢の中で見たのだらうか。夢の中で、此れとそつくりの景色を、私は再三見たやうな心地がする」

・ C 「田園の憂鬱」天佑社版

「彼はその月を飽かずに眺めた。ああ、これと同じ事が、全く同じことが、その時も俺はここにかうして立つて居た。遠い微かな穴の奥底のやうな昔にも、現在と全然同一な出来事が曾てもあつた」

「彼はこれと同じやうに、全く同じやうに月の差込んで居る縁側を、ちやうど今のさつき夢に見て、目がさめたところであつた」

三、青い月夜の情景と映画のフィルムを比喩でつなげること。

・ 「母を恋ふる記」

「総べての物は依然として閑寂に、空も水も遠い野山も、漂渺たる月の光に蕩け込んで、其の青白い静かさと云つたら、活動写真のフィルムが中途で止まつたやうである」

・ B 「月かげ」天佑社版

「活動写真の青いフィルムのやうに青い月夜である」

四、子供が人気がない場所を一人で歩くこと。

・ 「母を恋ふる記」

「私は七つか八つの子供であつたし、おまけに幼い時分から極めて臆病な少年であつたから、こんな夜更けにこんな淋しい田舎路を独りで歩くのは随分心細かつた」

・ C 「田園の憂鬱」天佑社版

「彼はその頃からそんな風な淋しい子供であつた。さうして彼の家の後である城跡の山や、その裏側の川に沿うた森のなかなどばかりを、よく一

人で歩いたものだった」

五、夜一人で歩いていて不思議な女に会うこと。

・「母を恋ふる記」

引用は行わない。

・ D 「青白い熱情」 初出版

「去年の晩春のある夜であった、私は身に何とも知れない昂奮と陶酔とを感じて、須田町の通りをどういふ風にあつたか、道に迷うた人のやうに歩き廻つて居た。(中略)その時に私はその道を曲がる角毎に、必ずその少女が突立つて私の足もとを見下して居るのを見た」¹⁰⁰

六、涙が女の頬から転がり落ちること。

・「母を恋ふる記」

「すると、その皎々たる頬の上からきらり／＼と閃きながら、蓮の葉をこぼれる露の玉のやうに転がり落ちるものがあつた」

・ D 「青白い熱情」 初出版

「さうしてその時、私はその女の円い頬の上に落ちたものがあつて、それが頬の上で弾かれたやうに滑ると、美しいその頸を伝うて、盤上の真珠のやうに転つて消え落ちたのを見た」

*涙を流したのは谷崎作品では女、佐藤作品では「私」だが、いずれも涙は女の頬を転がる。

七、女の顔を見ても誰だか思い出せないこと。

・「母を恋ふる記」

「何と云ふつて、お前は私を忘れたのかい？」

私はお前のお母様ぢやないか」かう云ひながら、女は顔を出るだけ私の顔に近づけた。その瞬間に私ははつと思つた。云はれて見れば成る程母に違ひない」

・ D 「青白い熱情」 初出版

「私は A・F の顔に自分の顔を並べてその女の顔を覗き込んだ。(中略)私はその顔をちつと見づけた。さうして何処かで屢々見た事のある顔だと思つた。さう思ひつづけたけれども、それをどうしても思ひ出せなかつた」

八、死者としての自分を客体化すること。

・「母を恋ふる記」

「實際今夜のやうな景色に遇ふと、誰でもちよいと死んで見たくなる。此の場で死ぬならば、死ぬと云ふ事がそんなに恐ろしくはないやうになる」

・ C 「田園の憂鬱」 天佑社版

「自分は遠からず死ぬのではなからうか……それにしても知つた人もないこんな山里で、自分は、今斯うして死んで行くのであらうか」

・A「月かげ」初出版

「彼は、或る時——嗟、それが彼の死の方へ踏み出した第一歩であつたが——水郷の美しい月夜を、詩に綴らうといふ考へを起したのであつた。ある一人の若者が、月夜の町をそぞろ歩きして居るうちに、ふと、ある濠割ほわぎのなかに、浮んで居る自分自身の死屍を見出すといふ筋を」

以上の類似点に関して、問題なのは一つ一つの近さと言うよりも数の多さである。同時期に二人の作家の間にこれだけ顕著な重なりが見いだせることは例外的と呼ぶべきではないか。佐藤自身は次のように証言する。よく引用される一節だがここに掲げておこう（潤一郎。人及び芸術「改造」昭和二年三月）。

僕が潤一郎と相知つたのは大正六年の初夏であつた。その後約五年間の製作については、いやその後殆ど凡ての製作の動機やら或ひは製作の有様やらを親しく目のあたりに見たし、或ひは見たと全く同じ如く想像することもなし得る。僕が潤一郎を論ずる為めに適任の度を越えてゐると思ふのは実にその為めである。

潤一郎がなかつたならば僕の芸術的生涯はなかつたらうと僕は屢々感に打たれる。同時に潤一郎は彼

自身は何といふかは知れないけれども僕と日々往來することに依つて彼の文学的境涯を急速に回転させるたのではないかと考へないでもない。嘗つて潤一郎は僕のことを記した一文の中に僕に依つて啓発されたところが尠くないといふ意味を述べてゐた。

この文章の中で佐藤は「母を恋ふる記」を直接取り上げてはいるわけではない。しかし、文学的盟友としての自負に満ちたこの証言はやはり一定の強度を持っていると思われる。一〇八の対照は、「母を恋ふる記」の部分的な表現や発想が「僕に依つて啓発され」て作られた、いわゆる影響関係にあることを告げていると言えるだろう。その「啓発」は谷崎が佐藤作品を読み込むことによつて行われているのである。

さらに第一の仮説から波及する疑問を付言しておく。先の五〇七はいずれも母に関わる類似点である。なぜ谷崎はこの時期に母恋いものの出発点になる作品を書こうとしたのか。それは佐藤作品との関係性が一つの理由ではなかつたか。

大正六年五月に母の関が亡くなった直後、谷崎は母を描いた。六月に発表された「異端者の悲しみ」の「はしがき」、及び「晩春日記」である。これらはもちろん虚構化が施されてはいるだろう。だが形式的に見れば、前者は作品の発表に関わる事情について説明する作者の肉声である。後者もまた形式的には「晩春

日記」であり、谷崎の美人生の事情に通じた読者にとっては事実の記録に近い受容がなされる可能性が高い。両者とも通常はフィクションの周縁にあるテキストである。谷崎がフィクションの中に母の死を取り入れた最初の作品は、大正八年一二月発表の「母を恋ふる記」と見なすのが順当だろう。現実の死と作品の間に約一年半の懸隔がある。この間に佐藤との接近、佐藤作品への親炙があったのである。

本稿は谷崎作品↓佐藤作品↓谷崎作品というフィードバックがあつて、母がフィクション化されたと考える。鍵となるのは母の顔である。「異端者の悲しみ」の「はしがき」及び「晩春日記」とC「田園の憂鬱」を比べてみよう。

九、母を描くこと。

・「はしがき」

「予が、旅装を解く隙もなく冷めたい骸に近づいて、面を掩うた手拭を払つて見ると、あの醜い丹毒の跡は名残なく取れて、その昔、刷り物に出た娘番附の大関に数へられ、生前屢々、予が姉ではないかと人に訝あやしまれた美しい母親の顔は、白蠟ろうの如く晴れ晴れとして浄らかであつた」

・「晩春日記」

「病名は丹毒」とあり」

「当年五十四歳とは云へ、産褥の外には未だ嘗

て病の床につきたることなき母上の、色白くきめ細かく眉目秀で、君が姉上にはあらずやなど屢々人に疑はれし若々しき容貌は、口鼻のありかもわからずふくれ上り、あまつさへ黒き練り薬あせもて一面に塗抹されたれば、ぬばたまの夜の闇に迷ふ陰鬼の姿もかくやと思はれて、ひたすらに胸つぶる、ばかりなり」(傍点引用者)

・C「田園の憂鬱」

「その母へも、父へも、どの兄弟へも、彼はもう半年の上も便りさへせず居た。彼は第一に母の顔を思ひ出さうと努めて見た。それは、半年ばかり前に逢つて居ながら、決して印象を喚び起せなかつた。奇妙にも、無理に思ひ出さうとすると、十七八年も昔の或る母の奇怪な顔が浮び出た——母は丹毒に罹つて居た。黒い薬を顔一面に塗抹して、黒い仮面のやうに、さうして落窪んだ眼ばかり光らせて、その病床の傍へ来てはならないと言ひながら、物憂げに手を振つた怪物のやうな母の顔である」(傍点引用者)

谷崎は母の顔の二面性、美と醜を対比的に描き出している。「丹毒」といういかにも恐ろしげな名が両者に登場し、特に「晩春日記」ではグロテスクな描写が微に入っており、「黒き練り薬」がその怪異さを際立

てている。しかし驚いたことに、佐藤作品の中にも同様な描写が見られるのである。

「丹毒」はさほど珍しい病気ではなく、大正期には山路愛山や松方正義らもこれに罹患し、新聞で取り上げられている⁹⁰。誰かが丹毒であることを公に告げることはタブーではない。だが、黒色の薬品を道具立てとしながら患者の姿を「陰鬼」「怪物」などと表現して発表するのはまた別の話である。二人はともにもある節度を越えており、これは偶然の一致とは思えない。

おそらく佐藤は「はしがき」や「晩春日記」を読んでおり、翌年「田園の憂鬱」執筆の際に谷崎の描写を意識していたはずである。先の一八とは逆に谷崎作品が先行する事例である⁹¹。この同一性を押さえた上で、あらためて注目したいのは二人の差異である。谷崎の二作では、美しい母と丹毒の醜い母の顔が、並列可能なもの（思い浮かべる／今日の前にある）として対比されている。これに対し、C「田園の憂鬱」では、丹毒の醜い母の顔のみ目に浮かび、健康時の母の顔は思い出せない。母の対立する顔を並列させるか、それを拒否するかが両者の差異である。

ではC「田園の憂鬱」の後に書かれた「母を恋ふる記」はどうか。谷崎は「はしがき」や「晩春日記」同様、二人の母を出現させているのだが、単純な並列化は行っていない。なぜ描き方が変わったのか。ここで佐藤の描き方がヒントになったのではないか、とい

うのが第一の仮説の付説である。

「母を恋ふる記」では、まず年老いた母との出会いがあり、そのあとしばらくして（第一の時間差）美しい母を出現させるが、母であることをすぐには思い出せない（第二の時間差）。出合いは障害とともに起こる。

これらの操作は次のような経過をたどったのではないか。谷崎の「はしがき」や「晩春日記」を読んだ佐藤は、美しい母を消去し、忘却の主題を導入してC「田園の憂鬱」を書いた。谷崎はこれを読み、忘却の主題を取り入れつつ、美しい母を二人目として復活させた。「母を恋ふる記」の二人の女⁹²二つの顔はこうして可能になった⁹³。

忘却とは、言い換えれば見えているのに見えていないことである。一人の女に二つの顔がある。二つ目をどのように登場させるのか。見えているのに見えていないというやり方で――このような手法は、後の「春琴抄」の春琴の火傷と佐助の失明を準備したものである⁹⁴。

二

第二の仮説、主人公の「私」がさまよう場所には地理的なモデルが存在するのではないか、ということについて述べる。モデルとは神奈川県藤沢市鶴沼地区の

一画である¹⁰⁰。もう少し詳しく言えば、「私」は東海道線藤沢駅から少し南に下ったあたりを出発点として歩き始めて南に下り、江ノ島の西側の海岸近くからさらに西に向かつて歩いているはずである。この終点付近には、年表に大正七年谷崎が長期滞在した場所として記した旅館・東屋が含まれる。なぜこのルートなのかは後で説明する。

先にこの仮説に対して予想される反論に抗弁しておく。「母を恋ふる記」には、鶴沼地区の最大の目印になる二つの要素、江ノ島と路面電車が描かれていないではないか、という反論である。確かに海の描写はあるが島は見えず、また電車も登場せずその音も聞こえてこない。しかしこれに関しては次のように解答できる。谷崎は「私」が彷徨する場所に現実性を与えたくなかった。だが、全く架空の場所を作り上げるのは困難だったので、現実と最もつながりやすい二点を外したうえで、なじみの場所をモデルに選んだのだ、と。

「母を恋ふる記」には二つの場所が対比されている。「日本橋の真中」に代表される繁華な都会と「辺避な片田舎」であり、有名／無名に対応する。前者の側は複数の地名が挙げられており、東京の地理的な知識を持つ読者は、谷崎の伝記的事実とも結びつけながら特定のイメージを思い描いたことだろう。一方後者は冒頭から「人間の世を離れた、遙かな／＼無窮の国を想はせるような明るさ」に包まれた場所として提示され

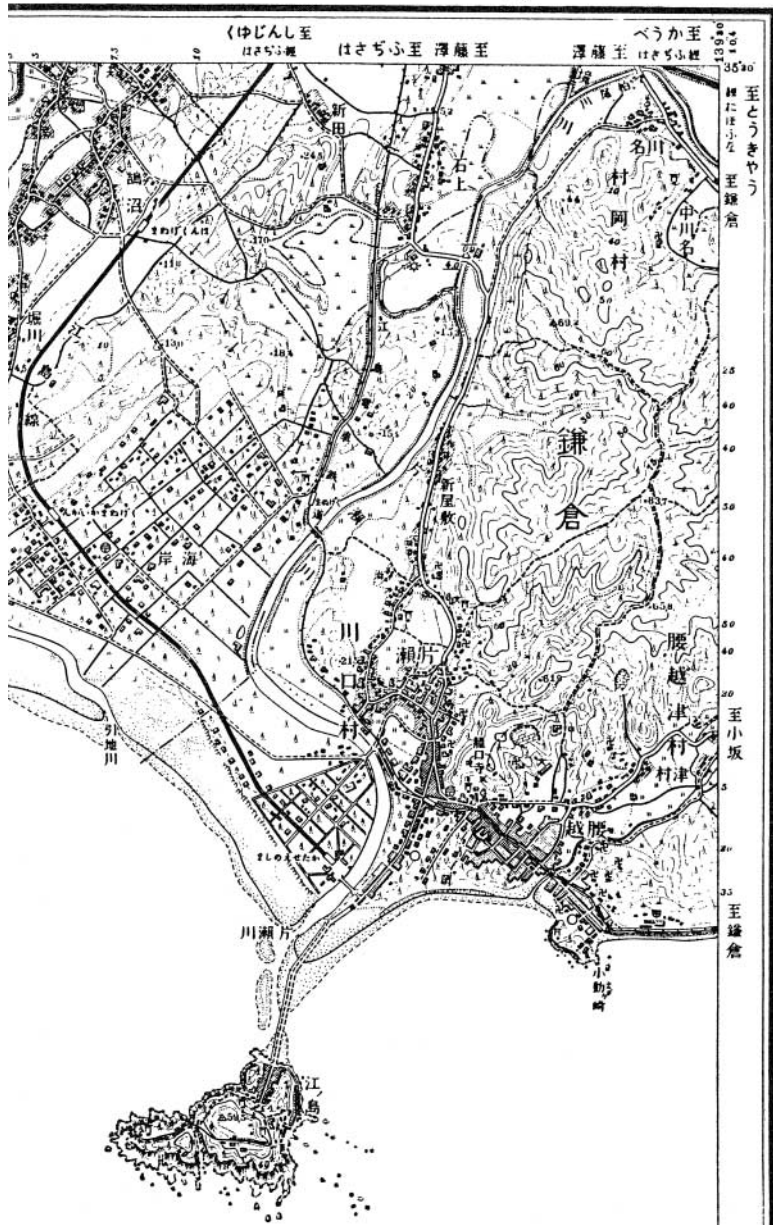
ている。前者は有名であることよって既知の、後者は「人間の世を離れ」ていることよって未知のイメージを与える。このようなイメージ操作は谷崎が初めから意図したものであったろう。すなわち谷崎は、二項対立の図式化を徹底的に行おうとしているのである。場所の対比で言えばこれは「小さな王国」（大正七年八月）の東京／G県M市に¹⁰¹、人間の対比で言えば「金と銀」（大正七年五月）などの作品群にしばしば用いられた二人の対極的な人物に、同一のパターンが見られる¹⁰²。「母を恋ふる記」には母と相似形でありながら対比的な女二人が順に登場するが、この二人の二項対立関係もまた同様である。場所と人間両方の二項対立を活用した作品と言える。

先述のとおり、谷崎は大正七年三月から九月まで鶴沼地区に長期滞在している¹⁰³。宿泊先は文士宿として知られた東屋である¹⁰⁴。また同年一月の芥川龍之介の手紙では「今日是从から鶴沼の谷崎君の所へ行つてとまつて来ます」¹⁰⁵とあり、宿泊先を東屋とは断定できないが、谷崎は一月にもこの地区に滞在していたと思われる。谷崎は一〇月には中国旅行に出かけ、一二月に帰国している。その後約半年間に発表されたまとまった作品は順に「美食倶楽部」「母を恋ふる記」「蘇州紀行」「秦淮の夜」「呪はれた戯曲」「西湖の月」の六作である。このうち三作で谷崎はエキゾチズムに満ちた中国の風景を描き、「母を恋ふる記」で「人間の世を離れ

た」夢幻的な風景を描き出す。中国から帰国後の半年間は、谷崎が特異な風景を描き出すことにこだわった時期であると言える。本稿では踏み込まないが、「母を恋ふる記」を中国旅行もの三作と関連づけて論じる視点が有り得るだろう。

さて、これから鶴沼地区が地理的モデルであることを証明していくが、初めに大正一〇年測図の地図²¹⁾を揭示する。これをA図とする。A図の中で注目してほしいのは、北から下った江之島電車鉄道（当時の一般的な呼び方に従う。A図では江島電車鉄道と表記されているもの）の発電所付近から鶴沼駅あたりまでの路線の周辺部、及び鶴沼駅の南部・南西部から海岸部分、江島線（大正一〇年当時は存在しておらず、昭和四年にこの鉄道のみ挿入して地図が作成された）の鶴沼海岸駅の南部にかけてである。鶴沼海岸駅の周辺部は住宅地（当時別荘地として知られていた）であり、その一角に東屋がある。

A図を簡略にし、必要なもののみを本稿の筆者が書き込んでわかりやすくしたのがB図である。



二万五千分一地形圖横濱近傍十二號共十二面
 横須賀九號大磯ノ一



この地域と「母を恋ふる記」の地理的環境はどのよう
に類似しているのだろうか。「私」がたどる「街道」、
及び視覚や聴覚を通して「私」が察知する周辺部の特
徴的な要素を五点に分けてまとめ、それらの要素がこ
の地域に存在することをA図を含めた資料を参照して
説明する。資料はできるだけ大正時代のもの（大正十
二年の関東大震災で甚大な被害を受ける以前のもの）
を用いるが、若干明治後半期のもものも付け加える。な
お検証のための資料について最も多く知見を得たのは、
渡部瞭（鶴沼を語る会副会長、鶴沼郷土資料展示室運
営委員）が「鶴沼を巡る千一話」と題してインターネット
ト上に掲載していたホームページであることを断つて
おく。

作中で地理的な特徴が書き込まれているのはほぼ、
二人目の女が現れるまでであり、作品の分量的には冒
頭から三分の二までの部分に当たる。広々とした海に
出て今まで来た街道を振り返り、さらに波打ち際を歩
くあたりで終わりである。

以下の五点、一〜五の記述は「母を恋ふる記」の本
文引用、その他の資料の順に行う。*は本稿筆者の補
足である。

一、松並木と松風

・「母を恋ふる記」

「街道の両側には長い／＼松並木が眼のとゞく限

り続いて、それが折々左の方から吹いてくる風の
ためにざわ／＼と枝葉を鳴らして居た」。
「さあツ／＼と云ふ松風の音が丘全体を揺がして
ゐる」。

「松の縄手」、「松原」、「松の木の林」。

・A図

江ノ島道沿いに松並木の記号が確認できる。

・高三啓輔『鶴沼・東屋旅館物語』（博文館新社
平成九年一月）

「明治二十年代以降、鶴沼の砂丘地帯に道が本格
的に整備され、松が植えられ、格好の別荘地とし
て売りに出され」。

・渡部（前出）

「この鶴沼海岸別荘地は、格子（こうし）状に直
行する地割りと道路網を建設し、クロマツを植栽
することから始められ」。

・難波龍之介『日本之風俗』（龍文館 明治三九年
一月）

鶴沼海水浴場の紹介に、「距藤沢、二十町、足
之所履、無不白砂、目之所観、無不青松、白砂青
松之字句、唯可施於此地而已」。

・上原綾子『ひなげしの花』（文陣閣出版部 大正
三年七月）

「鶴沼の半日」と題した章に「語る間もなく早鶴

沼、松林の間に電車を捨てた」、「右も左も小松原、松のみどりが長く伸びて」。

二、(蓮)沼

・「母を恋ふる記」

「長いく松原の右の方には、最初は畑があるらしかったが、歩きながらふと気が付いて見ると、いつの間にやら畑ではなくなつて、何だか真暗な海のやうな平面がひろくと展けて居」る。そして「青白いひらくしたものが見えてたり隠れたり」し、「皺がれた、老人の力のない咳を想はせるやうな、かすれた音を立て」る。しばらく歩いて「例のカサカサと云ふ皺唄れた物の音が未だに右手の闇の中から聞えて居」り、それはやがて「真暗な茫々たる平地は一面の古沼であつて、其処に沢山の蓮が植わつてゐた」と分かる。この「カサカサと云ふ音」は海際に出る前に聞こえなくなる²⁹。

・渡部(前出)の解説から本稿の筆者がまとめたもの

現在私有地にあるものをのぞき、蓮池は二つあるが(発電所の西・南西方向、川袋低湿地)、これは昭和初期の埋め立てによって宅地化が進んだ後に残ったものである。渡部はそれ以前に蓮池が

存在したかどうかについて詳細な調査を行っている。渡部は明治一五年測図、明治二〇年測図、大正一〇年測図を比較し、川袋低湿地に水田記号はあるが池らしいものは見当たらないとする。一方でこの地域の開発を行った高瀬一族の一人高瀬笑子の『鵠沼断想』を引き合いに出し、大正期にこの一帯を「沢地」あるいは「沼沢地」と記していることをあげ、一つの仮説を立てる。ハス(蓮)やイ(藺草)ヨシ(葭)やヒシ(菱)を植えた蓮田、藺田、葭田、菱田も水田記号で表されるので、「そこに池沼(ちしよう)があつても、有用植物に覆われていた場合、水田と見なされてしまう場合もあるのではないだろうか」。このようにして渡部は大正時代にも蓮池が存在したのではないかと推測している。

・関貢米『緑陰泉響』(高岡書店 明治三三年七月)
「亦江の島片瀬等より散策を試んとするには、片瀬川の河口、蘆葦繁茂する沼地を通り、波打寄する磯辺を伝い」、「海浜なる葭簣張の掛茶屋に至る」³⁰。

・上原綾子『ひなげしの花』(前出)

「鵠沼の半日」と題した章には、「見渡せば見る目はるけき松原つゞき巻葉大葉の幾片うかぶ蓮池の汀には引きぞわづらふあやめの真さかり浜ちかき地の真昼近う空には一片二片の綿雲が、まぼろし

の如く浮んで居る」。この場所は主人公が訪ねた友人宅で、「よく江の島の棧橋を渡る人が見えましたのよ」とされている。

・谷崎が滞在した東屋の庭には蓮池が存在した。こちらを「蓮沼」と解釈することもできる。

・『風俗画報』（臨時増刊一七一号 明治三十一年八月）⁸⁶
「庭の池には白蓮紅蓮を栽培す」。

三、多数の電信柱

・「母を恋ふる記」

「たま／＼出会ふのは左側の松原に並行して二十間置きぐらゐに立つて居る電信柱だけである」という形で登場し、「私」は「七十本目の電信柱を数へ」ることになる。「電信柱のごう／＼と云ふ唸り」は海際に出る前に聞こえなくなる。

・「こんな淋しい田舎路」と冒頭に記されているが、田舎にもかかわらず電信柱が道に沿って延々と立ち並んでいる点に謎がある。

・大正時代鶴沼に滞在した岸田劉生は風景画を描いている。大正一〇年「窓外夏景」や大正一一年「窓外早春」に、道に沿って電信柱が立ち並ぶ様子が描かれている。

・渡部（前出）他

「江之島電鉄」東側に明治四十一年に発電所が建設され、翌年には鶴沼地区に電灯がともった。

・発電所の存在はA図でも確認できる。「七十本」

あったかどうかはともかく、発電所から「江之島電鉄」沿いの道路、あるいは別荘地へ向けての道路に電信柱が立ち並ぶのは当然と思われる。

四、茅葺きの家

・「母を恋ふる記」

「一軒の茅葺きの百姓家」を見つけた「私」はその家に入っていき、第一の母と出会う。

・『風俗画報』（前出）

「鶴沼」の項に、「今は蜂須賀、高崎、田中、伊東等諸家の別荘十四五ヶ所あり。皆茅屋にして間雅愛すべし」。また、「東屋」の項にも「辺りは砂地の松原にして、処々に茅屋の点在するあり」。同書には東屋と海岸、海を描いた絵も掲載されているが、家々の屋根は茅葺きになっている。

五、砂地

・「母を恋ふる記」

「何だか足の下が馬鹿に柔かになつて、歩く度にぼくり／＼と凹むやうな心地がする。きつと

路が砂地になつたのであらう」。海際に出ると「街道と波打ち際との間には、雪のやうに真白な砂地が、多分凸凹に起伏してゐるのであらう」。

・一と四で取り上げた資料。

* 鶴沼海岸は明治時代から有名な海水浴場であつた。

以上の資料から「母を恋ふる記」の「私」の移動する場所とこの地域に共通点があることは疑えない。では、あらためて「私」がこの一帯をどこからどこへ移動したのかを考えてみる。地域をより限定できる資料が存在する。

谷崎は友人和辻哲郎との交友を語る文章を残している。この和辻と鶴沼の縁が深いのである。和辻は東京帝国大学の卒業論文を執筆するために、二万坪以上の敷地を誇つた鶴沼御殿と呼ばれる高瀬三郎邸の離れを明治四四年末に借りて卒論の執筆を行った。高瀬三郎の息子・弥一が和辻の大学の後輩に当たる。この時谷崎も東屋に滞在しており、二人の間には行き来があつたのだが^①、和辻はやがて弥一の妹と結婚し、大正四年から七年まで敷地内の家で暮らした。この二番目の鶴沼時代の交流について、谷崎は昭和三六年「和辻君について」で、「彼の鶴沼時代には私も鶴沼に住んでゐた」と書き、さらに昭和四三年に「若き日の和辻哲郎」という題の文章を発表する。そこで谷崎は和辻哲郎

を訪ねた時の道行きを細かく描写している。

藤沢から鶴沼片瀬腰越を通つて七里ヶ浜から鎌倉へ行く電車、今は江ノ電と云つてゐるが、当時は何と云つてゐたか、その頃は小田急電車はなく、単線のこの電車一本だけが淋しい鶴沼の松林の中をトボトボと走つてゐたが、それを①鶴沼の停留所の一つ手前あたりの、一層淋しい人氣のない所で下りて、②左手の小高い砂山の丘の方へ五六丁も登つて行くと、そこに一軒の不思議な家があつた。今はあの辺はどうなつてゐるか知れないが、その時分は電車を下りてからその家へ行き着くまでは、一軒の家もない。一面の松林の中に細い小径こみちが通じてゐた。③一度私は、その家でしやべつてゐるうちに日が暮れて、帰り路が真つ暗で林の中へまぎれ込んで困つたことがあつた。「君は夜おそく東京から帰つて来る時なんぞどうするんだね、これで路が分るのかね」と和辻に云ふと、「なあに、何でもないよ、さう云ふ時は下を見ないで上を見て歩くんだよ。さうすると小径の通つてゐる上だけ、松と松との間に隙間があつて、そこにだけ空の星が見える。それを頼りにして帰るのさ」と云つてゐた。(①)③の番号と傍線は引用者による)

真つ暗な松林を歩く谷崎の心細さがよく伝わってくる。②に関しては、「母を恋ふる記」中の「そこで左へ曲つてゐる街道の五六町先には、一つの丘があるらしい」と対応する。③は「今通つてきた松原も、此れから行かうとする街道も、私の周囲五六間ばかりの圏の内を除いては、総べて真黒な闇の世界である。あんな暗い処を自分はよく通つて来たものだと思はれる」あたりと近い。また、①の停留所は、当時の藤ヶ谷停留所であり、「高瀬邸前」と車掌がアナウンスを付け加えていたという話が残っている（渡部 前出）。

この文章の記述を加味して考えると、「母を恋ふる記」の「私」が歩いたルートをほぼ確定できる（ただし右に曲がったり左に曲がったりするという細部まで一致することは証明できない）。B図で確認する。出発点は藤ヶ谷駅付近（あるいはもう少し北部の発電所付近）で、そこから南ないし東（和辻邸を第一の女の家と見なした場合）に進む。このルートの進行方向に対して右側に川袋低湿地があるので、作中の「街道」の右側に蓮沼があるという記述（先の「二、（蓮）沼」で引用した部分）に符合する。そこから南ないし南東に進んで徐々に海岸部に近づき、北西に方向を変えて海岸線にほぼ並行に進めば、東屋付近にたどり着く。江ノ島が描かれていないのは、歩く方向から考えてそれが「私」の背後に位置するからだという説明も成り立つ。

三

以上、一章二章で第一第二の仮説の論証を行った。謎に満ちた、それゆえ魅力的と言える「母を恋ふる記」の女性イメージや道行きを語る上で、母の死や深層心理、民俗学との関連を探ることは確かに重要である。だが一方で作品の題材を近さにおいてとらえ得る可能性にも再検討が必要だろう。本稿は、佐藤春夫と署名されたテキスト、そして一〇〇年前の鶴沼という土地を谷崎潤一郎に再接続する試みである。

(1) 谷崎潤一郎「佐藤春夫と芥川龍之介」（昭和三九年五月）。

(2) 野口武彦『谷崎潤一郎論』（中央公論社 昭和四八年八月）、永栄啓伸「谷崎文学における美学——『母を恋ふる記』を中心に——」（『芸術至上主義文芸』昭和五三年一月）、千葉俊二「母を恋ふる記」とその前後」（紅野敏郎編『論考 谷崎潤一郎』おうふう 昭和五五年五月）。その他、森安理文「母を恋ふる記——虚構の挽歌」（森安理文『谷崎潤一郎 あそびの文学』国書刊行会 昭和五八年四月）、二瓶浩明「〈母〉の〈夢〉、〈物語〉の〈夢〉」、谷崎潤一郎の、——「母を恋ふる記」をめぐる——」（『愛知県立芸術大学紀要』平成二年三月）、アンソニー・リーマン「母を恋ふる記」における母体の

風景」(平川祐弘 萩原孝雄編『日本の母 崩壊と再生』新曜社 平成九年九月)、秋山公男『母を恋ふる記』——冥界への旅(秋山公男『近代文学美の諸相』翰林書房 平成一三年一〇月)など。

(3) 千葉俊二「母を恋ふる記」とその前後(前出)。

(4) 森安理文「母を恋ふる記」——虚構の挽歌(前出)。

(5) 福岡大祐「記憶」の切分^{コトバ}失神——「母を恋ふる記」における「動くもの」と「静止したもの」——

(「文芸と批評」平成二三年一二月)。

(6) 特に大正時代の谷崎に関しては、佐藤春夫の「潤一郎。人及び芸術」(昭和二年三月)、「指紋」の頃(昭和四年三月)、「潤一郎と僕」(昭和五年四月)など。

(7) 中村光夫『佐藤春夫論』(文藝春秋新社 昭和三七年一月)。

(8) 谷崎潤一郎「佐藤春夫と芥川龍之介」(前出)。

(9) もちろんん月を見て永遠を思うという発想自体は特別なものではない。また、これはプラトニズムともつながっている。谷崎作品の中に表れるプラトニズムは、「前科者」(大正七年二月〜三月)の「君のやうな masochist の頭の中にある女の幻影も、やつぱり或る一人の女性ではなくて、完全な美しさを持つ永遠の女性なんだらう」や「金と銀」(大正七年五月)の「フット、ライトの光の中を飛び狂つて居る彼女が、永遠の国の女王の形を模造した、不完全な影に

過ぎない」に早い例としてある。また佐藤「青白い熱情」は露骨にプラトニズムの援用が見られるが、「たぶん永遠の世界から」娶ったという少女が登場する。

(10) ただし、迷路のような街を歩き回るといふ展開は、谷崎の先行作品に見られる。「秘密」(明治四四年一月)や「詩人のわかれ」(大正六年四月)。

(11) 山路愛山は大正四年九月一日「読売新聞」、松方正義は大正一〇年三月六日「読売新聞」。いずれも快方に向かっていると報じられている。また、谷崎は「亡友」(大正五年九月)で、丹毒に犯された後亡くなった人物を描いている。

(12) 佐藤が谷崎を踏まえた例は他にもある。たとえば地形と人間を比喻でつなげること。

・ 谷崎「鬼の面」(大正五年一月〜五月)

「壺井は人間の容貌を、こんなに近い所でまざくと眺めるのは今が始めてのやうな気がした。凡ての輪郭が恰も虫眼鏡を掛けて見るやうに拡大されて、高々と岩の如く聳えて居る豪壮な鼻柱や、洞穴ほどの鼻腔の中に鼻毛の生えて居る塩梅や」

・ C 「田園の憂鬱」天佑社版

「丘はどこか女の脇腹の感じに似て居た」
「丘の頂には雑木林があつて、その木は何れも、彼の立つて居る場所からは、一寸か五寸位かに見える。さうして短い頭髪のやうに裸の丘の頂にだけ見える」

両者はたとえるものとたとえられるものの関係が正反対であり、佐藤が谷崎を転倒している。「母を恋ふる記」にも、「膨らんだ頬ぺたの蔭から、少しづつ、実に少しづつ、鼻の頭の尖りが見えて来る。ちやうど汽車の窓で景色を眺めてゐる時に、とある山の横腹から岬が少しづつ、現れて来るやうな工合である」という同様の描写がある。

さらに「鮫人」（大正九年一月〜一〇月）で谷崎は、岬や家の屋根、建築を容貌の比喩として使用し、「二人の人間の容貌を説くのも一国の地勢を述べるのと同じ労力が要る」と言う。千葉俊二はこれを、「当時、佐藤春夫の薦めで読んでいたバルザックからの影響としばしば指摘されるところのもの」と述べている（『潤一郎ラビリンスⅩ』の解説 中央公論社 平成十一年一月）。

「地勢」にたとえられた容貌は巨大化する印象を与える。これは映画館の巨大なスクリーン上の人体や顔のクローズアップとの関連で考えるべき課題でもある。谷崎は「活動写真の現在と将来」（大正六年九月）で、「人間の容貌」には「神秘的な、荘嚴な、或る永遠な美しさが潜んで居」り、それを「活動写真の「大映し」の顔を眺める際に、特に「強く感じると述べている。

(13) この点は先の「七、女の顔を見ても誰だか思い出せないこと」とも通じ合っている。

(14) 「人面疽」（大正七年三月）にその原型があるとも言える。

(15) 村井浩子「母を恋ふる記」を読む——ユング心理学より見た谷崎潤一郎の夢（「明の星女子短期大学紀要」平成四年三月）は谷崎の生活圈と海の近さに着目し、日本橋から晩年の熱海・湯河原に至るまで海と関わりのある複数の地名を挙げており、その中に鶴沼も登場する。ただし、「母を恋ふる記」を特定の地名と結びつけているわけではない。

(16) 東京の複数の地名が実在するのに対し、地方はほかされている。ただし、G県M市やH山という表記は、当時の谷崎の妻の実家のある群馬県前橋市や榛名山と対応している。つまり近い時期に書かれた「小さな王国」は二つの場所がほぼ特定できるように書き、「母を恋ふる記」はそうしなかったということである。これは両作品の現実性／幻想性の差異として理解できる。

(17) 先に挙げた「小さな王国」の教師・貝島と転校生・沼倉も二人の「しやうきち」として対比関係にある（小林幸夫『「小さな王国」論』「作新学院女子短期大学紀要」昭和六一年一二月）。

(18) 谷崎はこれ以前にも数度鶴沼を訪れている。

(19) 野村尚吾『伝記 谷崎潤一郎』（六興出版 昭和五二年五月）など。

(20) 一月二五日岡榮一郎宛書簡。引用は「芥川龍之介全

集 第一八卷』岩波書店 平成九年四月)。

(21)「大正二〇年測図昭和四年鉄道補入」(大日本帝國陸地測量部 昭和五年一〇月)。複写は『日本列島二万五千分の一地図集成Ⅱ』(科学書院 平成三年一〇月)から行った。

(22)ホームページのアドレスは「<http://homepage3.nifty.com/kurobe56/ks/>」。取得は平成二六年二月。この中には鶴沼地区の地誌やゆかりの作家たちとの関わりが記され、谷崎の名も挙がっている。ただし「母を恋ふる記」についての言及はない。

(23)月夜を延々と歩いて古沼があるという筋書きは、さかのぼって谷崎の「詩人のわかれ」(大正六年三月)にある。道に迷ったFの前にはラストでヴィシユヌ神が現れる。

(24)これは川袋低湿地だけではなく、海岸寄りに沼が存在していた、つまり沼がかなり広範囲に存在していた可能性を示唆する。

(25)引用は復刻版(国書刊行会 昭和五〇年九月)による。

(26)野村尚吾『伝記 谷崎潤一郎』(前出)、勝部真長『若き日の和辻哲郎』(PHP文庫 平成七年四月)。

*引用文の旧字は新字にあらためた。

(島根大学教育学部特任教授)